

# 大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



島津義久は、天文2（1533）年に貴久の嫡男として生まれ、永禄9（66）年に父の家督を相続して、島津家第16代当主となりました。その後、対立する伊東氏を撃退して薩摩・大隅両国に加えて日向国に勢力を拡大した義久は、代々の盟約関係にあった大友氏とも対立することになります。

天正6（78）年の高城・耳川の戦い（宮崎県木城町）で大友軍を破った翌年に、「薩隅日三州太守藤原義久」と名乗った義久が、「南蛮国甘埔寨賢主君」（カンボジア国王）に宛てた国書の写しが、京都の霊雲院に残されています。それによると、天正7（79）年に、大友義鎮（宗麟）との交易を目指して薩摩沖に来航したカンボジア国王使の

船を、義久が捕縛し、敵対勢力との通交を遮断したことが分かります。船には、カンボジア国王サター一世が大友義鎮に贈った書簡と進物、加えて東南アジアの銀と鹿皮が積まれていました。

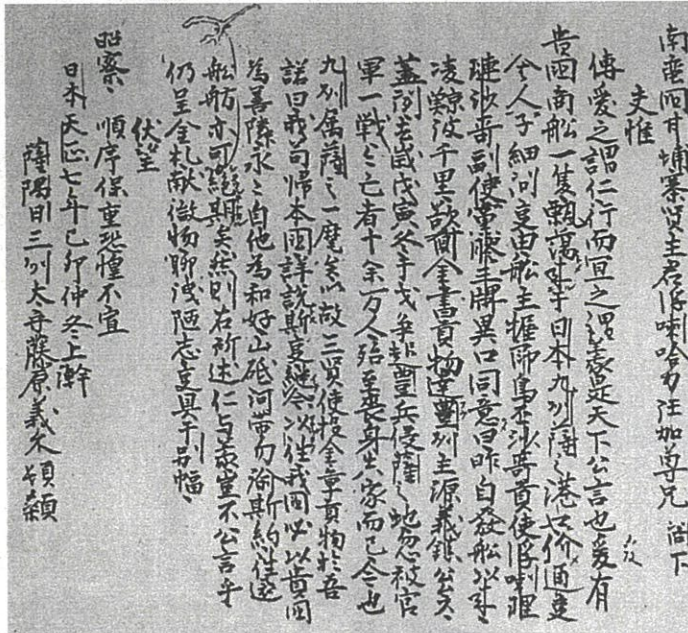
カンボジア国王使節に九州の政治情勢を説明した義久は、新たに島津-カンボジア間の外交交易関係を締結すべく、使節を説得します。その結果結ばれた両国の協約の文言は、次の通りでした。

「継今以往、我国必ず貴国をもつて善隣となし、永々に自他和好をなし、山砥河帯するとも、この約を渝めること勿く、往還の船舫もまた期を絶つることなかるべし」

「今後は、カンボジア国と薩

## 島津義久

### 大友軍破り、カンボジアと交易



「薩隅日三州太守藤原義久」と名乗った義久が「南蛮国甘埔寨賢主君」（カンボジア国王）に宛てた国書の写し

摩国で善隣外交関係を結び、永く相互に友好し、たとえ中国泰山が砥石のように低くなり黄河が帯のように細くなるうとも、協約を破棄したり、相互の国を往來する船を絶やすことのないようにする」との意味です。

この大友氏にすり替わっての

対カンボジア外交交渉を契機に、義久の跡を継いだ弟義弘は、慶長4～12（1599～1607）年の時期に、カンボジアやルソン（フィリピン）を相手とした東南アジア貿易を主導していくことになりました。

16世紀の戦国大名の活動は、

アジアの広範囲に及びます。特に、環東シナ海域の一角の九州大名にとって、目前に広がる海は、決して「陸路」の妨げとなる壁ではなく、自領と他領をつなぐ文字通りの「海路」として認識されました。

戦国大名という、国内陸上域での合戦ばかりに目が行きがちです。しかしながら、遭難や海賊襲撃などのリスクを冒しても、海路に船を就航させて諸外国と外交関係を締結することで、初めて、陸上に拠点を置く彼らの大名領国制の基盤が維持されていたことにも、留意しておく必要があります。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）



11月1回掲載